同窓会

古山　登

私が生れ育ったのは、北朝鮮の西北端、鴨緑江を挟んで中国の安東（現丹東市）と向き合う新義州府（市）である。

新義州は平安北道（県）の道庁所在地ではあったが、人口五万人台の地方都市で、私が中学に進学した昭和十二、三年頃は朝鮮人三万人強、日本人、中国人が夫々約一万人という人口構成で、学校は日本人小学校が一校に対し日本人小学校に当たる普通学校（朝鮮人学校）が二校、中等学校は中学校一、高等女学校一の他朝鮮人生徒を多く含む商業学校と日本人中学校に当る朝鮮人の高等普通学校が一校あったと記憶している。（私の中学卒業後の太平洋戦争末期に工業学校、師範《教員養成》学校が開校されているが、私は知らない）

私はそこの小学校に六年、中学校に五年（旧制の中学校は五年制）通ったわけだが、中学は一学年一学級、全校生で二〇〇～二五〇名という小ぢんまりしたファミリアな学校で、一年に一度東京と地方で隔年に同窓会総会が催される。

尤も、学校そのものは昭和二十年八月十五日の敗戦を以て廃校になってしまっているので、会員の最年少者が昭和二十年当時の一年生・昭和七～八年頃生れといった工合で、会員が増加するということは一切ないばかりか減る一方で、昨年は岡山今年は東京で催されたが、今年の出席者は五十六名、因みに最年長が八十二歳最年少が六十九歳であった。

会は型通り開会の辞に始まって十数項目の大会次第をこなしさいごに校歌斉唱・閉会の辞で終り、後はばらばらに二次会場へと散って行くのだが、北は北海道から南は九州まで、年一度のこの会を楽しみに首都圏外から集まって来る会員も二十名近い。今年はソウルからの参加者もあった。

私のクラスでは、九州久留米市から一名、山口県防府市から一名、四国高松市から一名と私を含め首都圏からは四名の計七名が出席し、来年は卒後丁度六十年になるのでクラスの還暦ということで九州あたりでクラス会をやろうじゃないかということになった。個々人にとっても、クラスで一番若いのが大正十五年三月生まれだから来年の三月末までに全

員喜寿（七十七歳）を迎える節目の年になる。

会は、毎年のことながら年に依ってアトラクションや飛び入りの余興で盛り上がることもあるが、大体は、殆ど全員年齢の所為で耳が遠くなっているからであろう声高になるが、予定通り進行し、やがて時間が来て、生きていればまた来年と再会を約して散会するのが通例である。会話も平凡、回想も記憶が曖昧になっている在り来りの〝老人会〟にすぎない。

会自体、何しろ全員〝死亡適齢期〟と云える平均年齢七十何歳で、今後新入会員ゼロだから、年ならずして早晩会員の大半が死に絶えて、自然消滅するだろうことは目に見えている。

そんな会であるけれど、会場には、たぶん同時代の青春を共有したという共感が醸し出してくれるのだろうと私は思うのだが、一種の親近感を湛えた雰囲気が漲っており、私はそういった雰囲気を、今後も、会が消滅するまで大切にしていきたいと思う。

「リテラの会」への私の愛着もこの同窓会に似たものがあるように思う。

「リテラの会」は、本校つまり女子短大の文芸科の卒業生ではなく、まして男性である私は逆立ちしても会員になる資格はない。にも拘らず、私の年中行事の中でこの会が中学の同窓会と並んで心の糧と云ってよいほど私の楽しみの一つになっているのは、私がこの会の設立を手伝ったという特別な思い入れもあるだろうが、何よりも会の持つ雰囲気が好きなのだと私は思っている。

今年は十五回という節目の年だったが「リテラの会」は今から十六年前、学校の援助もなしに資料室を中心に作り上げた手作りの同窓会である。だからであろうか何処か同志会といった趣があり、それ以上に全員が年代こそ違え同じ環境の青春を共有したという親愛感が漂う同族会のような雰囲気があり、私はその雰囲気が好きだ。今年は、「芙蓉会」会長齋藤檀さんも来賓として出席して居られたが「素晴らしい雰囲気ですねえ。芙蓉会も是非こんな風にありたいものです」というような意味の言葉を洩らしていらしたのを記憶している。

しかし、問題が無いわけではない。母体として土壌を育んだ「文芸科」が「現代文化学科」と改称したばかりでなく、二〇〇三年度はその「現代文化学科」も募集停止するということだから、私の中学の同窓会同様新入会員が望めなくなる正に危機に直面しているということだ。

一方、私の中学が廃校後五十五年以上経った今も同窓会が健在していることを思うと、例え科名が改称されようと或いは短大そのものが閉校して四大に吸収されようが、旗の台や茅ヶ崎キャンパスで青春を享受した思い出を懐かしむ者のある限り「リテラの会」の将来を心配することは無いようにも思われるし、また、そうあって欲しい。

もちろんこの私も会の維持・発展には手伝えることがあれば微力を尽くしたいと思っているし、その思い以上に、来年の総会にも、さらに次の節目に当たる二〇〇七年の二十回までは何とか命永らえて毎回出席し会員諸君と交歓したいものだと切に望んでいる。

さて、私はこの稿脱稿二日後の二十六日に七十～八十歳の爺ばかりの同窓ゴルフ・コンペをたのしみ最下位であった。

（二〇〇二・十一・二十四記）